

風土



鉾 回 す

南 う み を

売り声のをさなく高く鉾ちまき

全長をビルに映して鉾すすむ

鉾を待つ萬の団扇をひたあふぎ

序破急の急へと辻の鉾囃子

欄の尻大ゆれさ揺れ鉾回し

鉾衆の汗横飛びに辻回し

熊蟬も加勢ぞ辻の鉾回し

夏萩のまばらに花の盛りなる

ひるがほのくわつと赤子よいつまで泣く

かなかなのあれはたましひこする音

かの媪あさがほ棚のうらに病む

茗荷の子てんでに傾ぎ現るる



竹間集

同人作品



初 伏

中根 美保

棧橋に猫車伏せ梅雨の沼
大いなる影たたまるる葭簾かな
裏山の夕闇早し洗ひ鯉
水族館てふは名ばかり水草咲く
篋のそよぎもあらぬ初伏かな
身の芯を滑りゆきたり夏氷
手を入れしばかりの樹下に三尺寝

櫂の音

間島あきら

シヨウウインドに幾つ団扇の江戸小町
金亀虫あるく猿蟹合戦図
百歳に大き夢あり青葡萄
卵波立つ水陸バスに鯨の絵
萍や湖の奥より櫂の音
黒々と小魚群るる土用入り
萍や武相を分かつ大運河

合歓の花

宮川みね子

七月の大河は音のなき流れ
全身によるこびあふる燕の子
髪染めて草引きし夜を眠りけり
どしやぶりの駈けぬけてゆく星祭
庭先の静けさ梅を干しにけり
大瑠璃の鳴くふるさとに目覚めけり
合歓の花やさしき眼をもつ仔犬飼ふ

「蟬時雨」 浜 福恵

竹伐会終りてよりの雨あらぶ
ほとけらへ供へ日本のさくらんぼ
一山に八十八仏蟬時雨
文字摺草の螺旋ますぐにゆるやかに
誰か来ぬかと缶甘酒の冷えてをり
享保一揆の歴史の道や虫送り
漆黒の闇を渡りて虫送り

杏狩り 門伝史会

松代城囲む連山青山河
十万石真田の庄に杏狩り
幸村真田宝物館にてへ秀吉書状蝸牛
夏の月真田系図に友のゐて
夏萩や風よく通る冠木門
投函のあとの気がかり二重虹
水郷に物売りの舟行々子

「老樹」以後(三十) 野沢しの武

妻亡くて一人の皿のさくらんぼ
妻抜きたる人数分の形代書く
桐下駄を素足に履きて亡父の来る
くまげらの穴樹に残り山しづか
眠れねば短夜を二度三度醒む
白神の地図を拡げて夏帽置く
玉蜀黍食ふ一心になりてをり

虹の橋 鈴木石花

巴里祭の茶房ロージー席満たす
晚餐にロゼの栓抜くパリー祭
四日振りに来し小間てんとむし数多
先づ萍除けて蹲踞洗ひけり
斎場より浄めの席へ虹の橋
前山へ登りて望む筑波山
運転を辞めたる初の夏厳し

竹間集作家特別作品

アドリア海へ

中村洋子

乗り継ぎのウィーン空港明易し
朝霧にブルーレット城の隠さるる
朝曇り小舟でマリア教会へ
ポストイナ鍾乳洞へ青嶺かな
地底湖は大河の音に滴れり
洞内へトロッコに乗る夏帽子
噴水の風浴ぶ古代円形場
午後の陽の青空市場海芋咲く

ディオクレティアヌス宮殿 三句

サン グラス 集 合 場 所 へ「銀の門」
ハ ン カ チ を 畳 む 共 和 国 広 場 かな
涼 し かり フ リ ー タ イ ム に 洗 礼 堂
暑 さ かな ペ ッ ト ボ ト ル に 言 葉 の む
天 か け る 天 使 の や う な 夏 の 雲
ア ド リ ア 海 の 日 差 し 眩 し き 雲 の 峰
汗 の 引 く ド ブ ロ ク ニ ク の 街 眼 下
虹 の 立 つ 空 の 蒼 よ り 海 の あ を
パ ス ポ ー ト に ス タ ン プ 押 さ れ 日 の 盛り
百 の 滝 エ メ ラ ル ド グ リ ー ン 映 ゆ る な り
片 蔭 の 湖 の 底 な る 石 灰 花
税 関 を 抜 け 夏 旅 の 終 は り と す

国境にて

アフリトヴァイツェ湖水群 二句

山河集

同人作品



南うみを選

鉾巡行見えぬ荒縄軋ませて
鉾を待つ大群衆の団扇揺れ
昼寝児の髪より草の匂ひかな
辣蕪掘る地を這ふやうにいざるやに
足首を掴まれさうな葛の蔓

池田光子

萍や三日続きのタキシード
還暦の見合ひ八月十五日
峰雲や饒別は出埃及記
萍やいざ鎌倉の檄を待つ
海の日の海なし県の観光課
青鷺の骨軋ませて風を漕ぐ
水嵩の一寸命田水守
気配無き家と為りけり秋田路

森屋慶基

豎山道助

暗闇に触るるもの無き夏の夢
昼顔の絡むものなく盛り上がる
室町の老舗の奥の大檜扇
宵山の誉田屋の鯉の大幟
花器に挿すひまはり五本妻の座に
雨止んで日傘に変はる女傘
百日紅赤心は古語死語ならず
茄子の花ひとつで話はづみけり
妖精の転がしてゐる芋の露
彼方より野の動き出す大夕立
のうぜんは登りつめねばならぬ花
天井の染みありありと秋立ちぬ

杉本薬王子

本間羊山

のうぜん花かなたに吉野川曲がる
上迂蒼人

鮎釣師並びて黙の竿伸ばす
紀の国は木の国みどり連ねけり
横ばかり長き紀の国大夏野
古稀を過ぐ大和の端に昼寝して

十并ゆう子

梅干して母と二人の戦後あり
紫陽花の白の明るき夕べかな
緑蔭のがらくた市に長く居て
市庁前祭囃子を復習ひをり
梅雨晴や朝の葉缶の噴き出して

水井千鶴子

風鈴の音色抜けゆく青畳
七夕竹願ひの糸の短かり
花合歡に水車が廻る日暮れかな
戦よあるな夾竹桃のまくれなみ
前山は仏と暮るる盆の月

中嶋陽子

夕涼の手に提げ帰るざる豆腐
生まれたる庭に戻りぬ梅雨の蝶
銀河めく広き樹間に蜘蛛の糸
さくらんぼ山盛り名刺刷りにけり

青嵐子に一票の届きけり

雲の峰アンデルセンの低き家
玫瑰や北大寮歌口遊む
大道芸小銭を受くる夏帽子
郭公に耳をすませて芝目読む
虹立ちて羊は群れを解きにけり

遠藤道遙子

みなみかぜ黒牛の背を涉り行く
内藤静

海の口の暮れて明るき珊瑚礁
心経をふたたび三たび苔茂る
蟻湧くやここを曲がれば宗祇の碑
溪流に躋まで入り鮎を釣る

採血の眼は外へ夾竹桃
奥田茶々

盆唄にパソコンの手が踊り出す
打ち水や菓舗の三和土の黒光り
線香を供へメロンを下げにけり
からももや門の乳鉾は六文銭

雨宮桂子

夏椿落つイーハトーブの目覚め
七月や降る雨は降る賢治の田

◇特別作品◇

伊豆暮し

吉永すみれ

出湯川白鷺一羽初景色
浦風に松ヶ枝鳴れり初詣
年迎ふ水の流れの如暮し
あるがまま暮す山里初日射す
平河津ならんだの里安の仏の里は花盛り
花仰ぐこぼるる如く時流れ
日と遊び風とたわむれ花散れり
囀りや五百羅漢に千の耳

田水張り夜空の星を誘ひけり
水を撒き風の一日しめ括る
日は一つ命も一つ朱夏の海
丈六の仏半眼ねむの花
星流れ人は別れを繰り返す
日蓮岬これから先は月の道
さいかちの実のさわさと一揆の地
身の丈に暮す山里むかご飯
密教寺懐に抱き山眠る
石露咲くや晩節といふほの明かり
枯野ゆく夕日が風の彩を染め
冬冷の心を灯す師の一句

風土独語／南 うみを



萍やいざ鎌倉の櫂を待つ 豎山 道助

「萍」に対し、「いざ鎌倉の櫂」という意外な措辞を取り合わせました。じつと動かぬ藻叢を見つめての発想です。事あれば一瞬にして動きだす。静から動への転換を読み手に覚えさせるところが巧みです。

滝の前昂ぶれる人黙す人 渡辺 やや

この句は、滝の前の私を表現するのではなく、他者を描いたところが佳いです。滝を前にした人間の感情や意識を、「昂ぶれる人」「黙す人」と単純に分けました。これだけで私たちは頷くのです。

百日紅赤心は古語死語ならず 杉本葉王子

「赤心」とはいつわりの無い心のことです。その「赤心」を作者は死んだ言葉でなく、古人が言い、今でも大切な言葉として噛みしめているのです。咲き誇る「百日紅」を前にしての感慨です。

あぶられて鮎は大きくひれ広ぐ 奥田 茶々

焼かれゆく鮎がよく観察され、それが「大きくひれ広ぐ」とことばに定着しています。観察は適切なことばに定着されてはじめて読み手を納得させます。目を反らさないことが大事です。

太鼓腹押への効かぬ真蒸しかな 森屋 慶基

「真蒸し」は鰻の蒲焼のことです。その旨そうな「真蒸し」を目の前にしての人間心理を率直に表現しました。メタボなどなんのその、これまでの節制が押えられなくなりました。(以下略)

萍を大鯉の背が押し開く 森田 節子

密生した藻叢を割って突然大きな鯉の背が現れ、藻をもみくちやにしながら悠然と泳ぐ姿が見えます。鯉の後ろには水路ができていく。それが「押し開く」です。動きがうまく描かれています。

鉾巡行見えぬ荒縄軋ませて 池田 光子

この句は鉾立の縄組を知らない。「見えぬ荒縄」は表現できません。縄だけで組み上がった鉾に豪華な飾りが付けられ巡行するのです。みんなが「動く美術館」に目を注いでいる中、作者の耳は「見えぬ荒縄軋ませて」の音を見逃しません。佳き感覚です。

芋虫の逃げも隠れもせぬ太さ 本間 羊山

「芋虫」は蝶や蛾の幼虫で、大きいのは人の親指ほどもありません。食欲旺盛で、一晩で大きな芋の葉を平らげてしまいます。作者は、その堂々とした姿に「逃げも隠れもせぬ太さ」と賛辞(?)を惜しみません。

風土集

南うみを選



軽鼻の子の金の胸毛をふくらませ

川崎

森田節子

萍を大鯉の背が押し開く

扁額の「學校」支へ楷茂る

海の日の暈に子らのバタフライ

木挽町角のたび屋や水を打つ

草の絮飛んで夕日の濃くなりぬ

秋田

本間羊山

芋虫の逃げも隠れもせぬ太さ

箱庭の中は赤毛のアンのむら

縦横に拓地の道や稲の花

杖よりも低き婆ゆく片かげり

空蟬や台座の傾ぐ父祖の墓

宇治

渡辺やや

滝の前昂れる人黙す人

駅までを誰とも会はず日の盛り

D51の汽笛冷凍みかん食ぶ

草刈るや風青臭く渡り来し

白すぎる道に眩暈や夾竹桃

東京

奥田茶々

七夕の笹の縮れも紙縊りめく

大移動蟻が卵を運び出す

あぶられて鮎は大きくひれ広ぐ

白樺の疵隠さるる夏の霧

羽広げ風になりけり甲虫

横手

森屋慶基

着こなしに一目を置く日傘かな

太鼓腹抑への効かぬ真蒸しかな

留守番の母を案ずる大夕立

雲の峰右に左に崩れけり

どつどつ夏川をゆく木壺かな

福生

雨宮桂子

ユツカ咲く銀河鉄道の果てに

合歓咲いて十二単のオシラサマ

めいめいにきうりを提げてカッパ淵

夏蚕飼ふ男がひとりオシラ堂